代に於ける地方誌編纂の沿革」（青山定雄）、道光朝以來、幾度か補足改修せられて公刊せられた經世文編の諸本を比較考究し時代の變遷に伴つて、その間に內容的の差違あるを要領よく述べた「清末の經世文編に就いて」（百瀨弘）など、見るべきものが多い。池內博士ならびに執筆者諸士の健康を祈つて紹介の筆を擱く。

〔外山軍治〕

## 一百七十五種日本期刊中東方學論文篇目附引得（引得特刊之十三）

于式玉、劉選民編

一九四〇年二月、哈佛燕京學社發行

四六倍判、xliv—一九八—一三一—一二五—三六頁、價五元

これは一九三三年に出た于式玉編「日本期刊三十八種中東方學篇目附引得」のつゞきである。この三三年版はなかなか念入りに編纂されてあつて、われわれは大塚史學會の「東洋史論文要目」とともにしばしば厄介になつたものである。そして、大塚史學會のものは收錄の篇目は多いが著書索引がなく、分類も杜撰であり、また燕京のものは、何はともあれ收錄した雜誌・論叢が僅かに三十八種に止まつて居り、採錄洩れの論文も多いとは誰しもが不滿に思つてゐた所であつた。だが、かういふものゝ增補版や續刊は初版に比べて際立つてよくなるものである。これも、三三年版が僅か三十八種であつたのに對し、こんどの新版はその約四倍半の一七五種の雜誌・論叢を收め、篇目の數も約二倍の七千ばかりになつてゐるのであるから、舊版の最大の缺點に關する限りは大いに是正されたわけであり、新舊兩版の併用によつて（舊版に收められたものは新版には收められてゐない）、われわれのうける便宜は少くないと思ふ。

新版の體裁は、舊版と多少相異があつて、第一篇、分類篇目第二篇、篇目引得。第三篇、著者引得（二、三篇は「中國字庋攝」の順に依る）。第四篇、著者音譯引得の四篇より成り、舊版ではローマ字引きの著者引得の欄にも各著者の名の下に論文の題目が列記してあつたのが、新版では、第四篇のローマ字引きの著者引得からは、第三篇の頁數が出る樣になつてゐる所が先づ異なつてゐる。

この本は數日前に到着したばかりであつて、まだ全部には眼を通してはゐないが、いろいろ氣のついたこともあるから、ここに少し申し述べておかう。

卷頭の「所收日本期刊表」を見ると、一七五種のうち、約四十種が論集であつて、殘りが雜誌・年報類であり（この表に洩れてゐるものが一つあるから實際は一七六種となる）、序文によると燕京大學圖書館所藏のもののみに限つたといふ。なかなか

よく集まつてゐるのに敬服するが、やはり重要もなのゝ洩れてゐるのも眼につく。岩波講座「哲學」が收められてあるが、たとひこれは洩れてゐても、同講座の「東洋思潮」は是非收錄せねばならぬものであり、「東洋文化史大系」がはいつてゐるならば、これと並んで「世界歷史大系」も入れねばならないであらう。桑原博士の遺稿集三部のうち「支那法制史論叢」のみが洩れて居る。また「稻葉博士還曆記念滿鮮史論叢」が見あたらない。雜誌・年報では「滿蒙史論叢」、「考古學論叢」、「考古學」、「寶雲」、「南方土俗」、「京城帝大史學會誌」、「愛書」などあつてよく、特殊なものだが「瓜茄」や「椎園」などもあつてほしかつた。

舊版では所載雜誌の號數を示しただけであつたのが、新版では各論文の頁附けが詳しく示されてあつて、大變親切である。だが間々分載された論文の場合、それが完全でないものもある。

またこの新版には書評も少々採錄されてあるのは誠に結構なことゝ思ふ。だがよく見るとその採り方には定つた標準がない樣である。身近い例では、本誌第一卷所載の書評は採錄されてあるが、第二卷以後は採られてゐない。「歷史學研究」「漢學會雜誌」のものは採つてあるが、他は採つてない樣である。

それから、これは舊版と變つてゐないことだが、「分類篇目」の欄は「國學論文索引」と同じ分類法によつてゐる。もともとこの樣な出版は專ら利用者の便宜を計つて作られるものであるからにはこのことは至極當を得たことゝ思ふ。日支兩國から出てゐる數種の論文目錄が一々異なつた分類方法を持つてゐることは甚だ厄介で、それ等に馴れるまではかなりの勞を要するであらう。また、數種の目錄を一時に繰る場合も度々起るが、そんな時など、かういふのはすこぶる都合が好い。

卷末のローマ字引き著者索引は、難かしい日本人の名をなかなかよく讀んである。日本人の名前のよみ方は日本人にさへも判らないのが多いのだから、その苦勞も大抵ではなかつたとは察するが、まだ、三字の名の日本人を支那音で出したり、その他いろいろ不行屆の多いのが眼につく。今一段の配慮が望ましかつた。

新版には日本史や日本語・文學關係の篇目がかなり澤山はいつてゐる。だがそれ等はどういふ標準で採錄したのか頗る諒解に苦しむ。

最後に、全體からみて、この書の編纂はやゝ杜撰であると云ひたい。一七五種の期刊の八年分から七千の論文を採つたのでは充分とは云へない。嚴選して少くなつたのなら結構であるがどうもさうは云へない樣に思ふ。そして「東方學」の名にふさわしくない篇目が隨分多く收められてある。また、分類の間違

ひもかなりひどい。一々言つてゐては際限のないことであり、少々の例を持ち出しても仕方がないから、こゝには一切云はない。とにかく篇目の取捨と分類との點より云へば、舊版より大いに劣つてゐる。かうして第二版が出たところを見れば、數年すれば第三版もまた出る計畫なのだらうと思ふ。その際には十分の周到さを以てせられんことを切に望む次第である。

〔藤枝　晃〕

## 唐代の史學思想

金井之忠著

昭和十五年二月二十日弘文堂發行

（教養文庫）一六二頁

金井氏が何故唐代を取り上げられたかに就ては序文にも本文中にもこれといふ說明が見當らない。序文に「支那史學史の一節として又隋唐時代の理解に資する一助として讀まれることを望む」とあるだけである。普通考へられてゐる所では唐代は支那史學史全體からして確かに最も重要な時代の一つであるとされてゐる。一言にして言へば唐代は史書のオーソドックス卽ち正史といふものが一應完成して了ひ同時に行きづまつた時代である。正史といふ觀念、正史を作る爲の體例、正史を作る爲の史館の組織等あらゆる點に於て唐代はそれ迄の時代の集大成の時期であつた。これより後の時代に於ては支那の史學は正史そのものではもはや何等見るべき發展をなさず、史學者達は正史以外の形式に於てより多く活躍する樣になつた。通典を宗とする一群の類書と通鑑を祖とする編年體及び紀事本末體の史書等がその主なる形式である。又唐以後の史學者は史書の編纂以外の研究にも手を染める樣になつた。さうして見るとつまり唐代は一般史に於てもさうである如く漢代以來の集積物を一應總決算した時代だといへる。この意味でそれは確かに重要な意義を持つ時代ではあるが、飜つて史學史研究者の切實な求眞的心情よりすればこれは必ずしも餘り興味ある時代とはいへない。何故ならばそれは史學の製作が私撰より官撰へ、個人の手より數多の史官の手へ移つた時代であつて、換言すれば正史が著述より編纂物へ墮落した時代である。多人數の手に成る編纂物といふことになれば一貫した思想や方針が稀薄になるのは當然である。編纂の爲の義例が發達したのはこの弊害をなるべく少くしようとする努力の表れに外ならないが併し何といつても編纂物はついに編纂物に過ぎない。個人の優れた史觀がそこに鮮明に表はれることなどは求める方が無理である。劉知幾の史通は史館に於ける編纂の義例の理想を述べたものであつて唐代（特に初唐）史學界の代辯者の觀があるが、彼の立場が史館の編纂物を目標とする限り吾々の興味も自ら限られたものにならざるを得ないのである。